

平地における林業地の形成とその変遷

——千葉県山武町を例として——

浜野 桂子

1. はじめに

日本においては、人間の生活は、第二次世界大戦まで「生産活動の場」として自然と密接に結びついていた。戦後、経済成長に伴って産業構造は急速に変化し、現在自然に求められているのは「快適な環境」を提供するという間接的な役割が大きく、「生産活動の場」としての自然とのかかわりは失われつつある。

しかし、日本で最も人口が集中し、政治・経済・文化他諸機能が集積する関東地方の平地に、昭和60年(1985)現在で299,404ha、全体の約1割を占める森林が存在する。この森林は、地域の人々には「山」と呼ばれるが、実態は「林」というべきもので、本論文では「平地林」と称した。

本研究で調査した千葉県山武郡山武町では、江戸時代以来平地林を利用した林業の歴史があり、現在もスギを主とする森林が町の半分を占めており、林業が営まれ、木材を利用する産業として建具業・木材業の成立をみた。山武町における林業の成立と展開、建具業・木材業との関連を考察することによって、ここで森林が利用され維持されてきた原因を明らかにし、平地林という自然と人間のかかわりを考えることを本研究の目的とした。

2. 関東地方の平地林の自然的・社会的性格

「平地林」とは一般に、関東地方において「傾斜が緩やかで、比較的標高の低い平坦地に存在する林野」というような意味で用いられているが、本研究では「標高300m以下で傾斜15°未満の土地が75%以上を占める市町村に賦存する林野」¹⁾とした。

まず、その分布をみると、関東地方平地林全体の約6割が千葉県・茨城県に分布し、千葉県の林野面積のうち58%、茨城県では47%を平地林が占めている。

昭和35年(1960)以降の平地林の面積は、全国

及び関東地方全体と比較してすべての都県で大きく減少しており、その変動も急激である。平地林の広い茨城県でも昭和45年(1970)以降減少が続いているが、千葉県では昭和55年(1980)から増加の傾向にある。

平地林の樹種は、図1²⁾のように茨城県・千葉県には針葉樹、その他の地域では広葉樹が卓越する。針葉樹はマツが主であるが、千葉県の下総台地東部にはスギが多い。

平地林が現在まで維持されてきた背景には、関東地方において昭和30年代前半まで一般的であった麦・かんしょなどを主体とする畑作と結びついて、農家が自給自足を達成するために、燃料・肥料の供給源として保持する必要があったこと、所有規模は零細であるが資産として備蓄的価値を持っていたこと、人口増加や都市化・工業化の進展に際しては土地の供給源としての役割を果たしてきたことがあげられる。

そして、昭和45年(1970)以降は環境保護・改善の立場からその存続が望まれているが、一方住宅地・レジャー用地などとしての開発も続いており、近年の日本の林業の不振から林業という生産活動の場として維持していくことも困難な状況にある。

3. 千葉県山武町における林業の展開と存続要因

下総台地南東部の山武町を中心とする平地林は主要樹種であるスギの生育環境としては、降水量が少なく乾燥しやすく、冬期かなり低温になるため必ずしも適地ではない。そこに林業が成立した原因は、江戸時代中期宝暦年間(1751年~1764年)といわれるさし木造林の開始当初には九十九里海岸におけるイワシの地曳網漁の発展に伴う木材需要の拡大があったことと考えられている³⁾。

そして、山武林業の特徴として成立当初から行われていたとされる造林方法は、以下に述べるよ

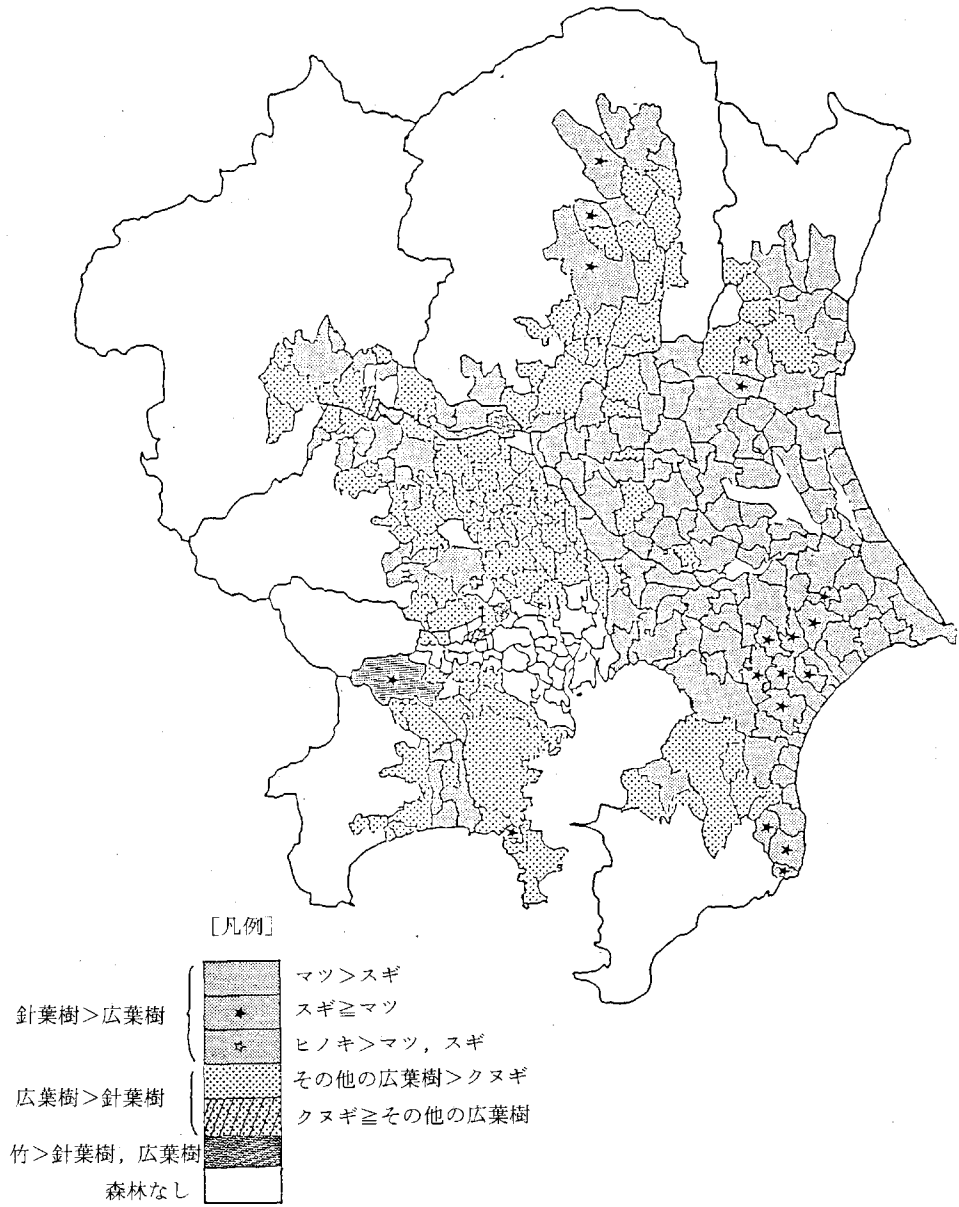


図1 市町村別平地林の樹種別分布図
 資料：林野庁「平地林施業推進調査報告書総括編」（昭和59年）

うに自然条件の改善と林業及び農業経営上の利点を合せ持った方法であった。

(1) 乾燥に強いマツ(クロマツ)を前植えて保護樹とし、数年後下木としてさし木で育てたサンプスギの苗木を植栽して、マツ・スギの二段林を仕立てる。

利点：①自然条件の改善—マツの前植えによって土壌の水分を確保し、乾燥を防ぎ、下木として植えるスギの生育環境を整える。また、マツは防風の役割も果たす。この場合に植えられるスギはこの地域の環境に適したサンプスギで、これをさし木で育て苗木とし植林する。

②前植えたマツは、燃料に不足する九十九里海岸一帯や、森林を十分に持たない地元民の燃料として需要が高く、マツはスギで収入を得られるようになるまでの収入源となった。

(2) 皆伐跡地は開墾して2～3年間耕地として使用し、植林後も2～3年は間作を行うという耕地と林地の輪換(切替畑)が行われた。

利点：①自然条件の改善—農作物を栽培することによって土壌の水分条件が良くなり、その後の間作では農作物も霜害から保護された。

②植林の際の地拵え、その後の下刈りなどの育林作業が軽減される。

③労働力の多寡との関連で、耕地としても林地としても利用できる点は、平地林の特色を表している。

(3) マツ・スギの二段林から純林に導かれたスギの高齢林は、需要に応じて択伐される。

利点：①自然条件の保全—伐採跡地が広い場合はヒノキ、狭い場合はスギが植えられたが、択伐であったため林地を露出させることが少なく地力の減退を防ぐことができる。

②需要に応じて択伐が行われたので、収入が安定的・継続的である。

山武町では、このような育林上の特徴のほかに平地林の一般的な利用形態である枝葉・かや・下草の採取が頻繁に行われていた。サンプスギの細かい年輪・柾目の美しさは、植栽後10年程はマツの下木として育成されたこと、枝葉・かや・下草の採取が盛んに行われたため林地が常に養分の不足している状態にあったことによって成長が抑制されたという人為的な要因が大きく作用して形成された。したがって、山武町の平地林は用材林と

しての利用と燃料源としての利用が不可分の関係にあったといえる。

こうして育成されたスギはサンプスギとして知られ、100年生以上の大径木を特徴としたが、材質は年輪が密で、油気が多く、幹は通直だった。そのため、用材として用いた場合、柾目が美しく年数がたつほどにつやを増し、九十九里海岸で潮風にさらされても、他材の倍の耐久年数があるといわれている。

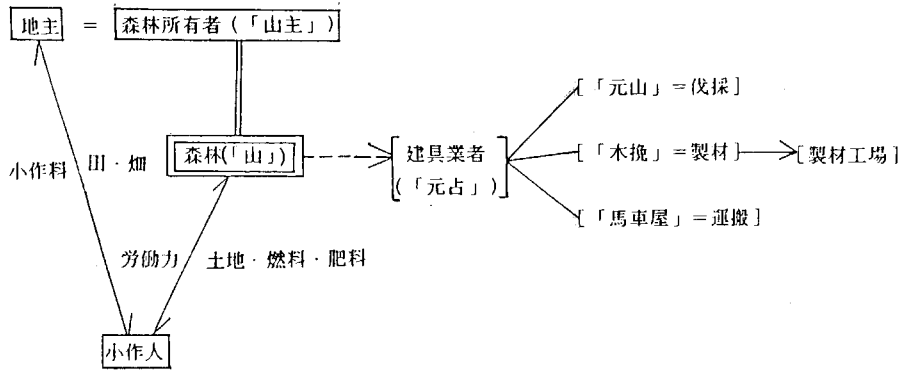
山武町の平地林で林業が定着した原因として、前述したように育林方法が自然条件と林業及び農業経営上の有利性を合せ持っていたことに加えて需要面では、江戸時代後期1800年代初頭に建具業が成立したこと⁴⁾が重要な意味を持ったと考えられる。

建具は柾目の美しい材料を必要とするが、この地域のサンプスギは育林方法と燃料源としての需要から必然的に建具に適した材がつくり出された。それを利用することによって始まった建具業は、九十九里海岸をはじめ関東大震災までは江戸及び東京へ出荷され、利根川沿岸から甲信地方まで販路を拡大した。

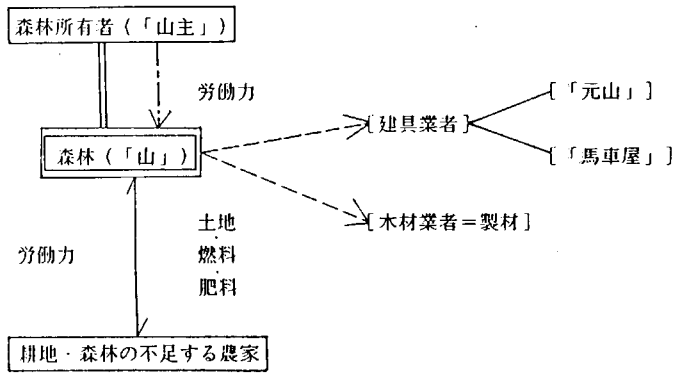
また、平地林であるので木材の搬出は比較的容易であるが、他地域への輸送に関しては、トラック輸送が普及する以前においては、河川に恵まれない内陸のこの地域は不利な状況にあったということができ、木材に比べ軽量の建具への加工は輸送上の不便さを克服したものと見える。建具業は江戸と銚子を結ぶ街道沿いの旧睦岡村埴谷や旧日向村に立地し、建具業者を中心とした木材の利用者集団を形成した。そして、林業に安定した需要をもたらすとともに、農民を「元山」・「木挽」・「馬車屋」として雇用し、出稼ぎにかわる就業機会をもたらした。

林業を支えた労働力や林業収入の面では、農地改革以前は地主・小作関係が重要な意味を持っていた。山武町では、「地主＝森林所有者(「山主」)」であり、「山主」は自家の奉公人や小作人を使ってほとんど費用をかけずに育林活動を行うことができた。また、通常は小作人からの年貢で家計を賄うことができたので、「山」からの収入は副次的なものだったことから、備蓄林として長年月保有することが可能となり、長期的に安定した収入が得られることになった。

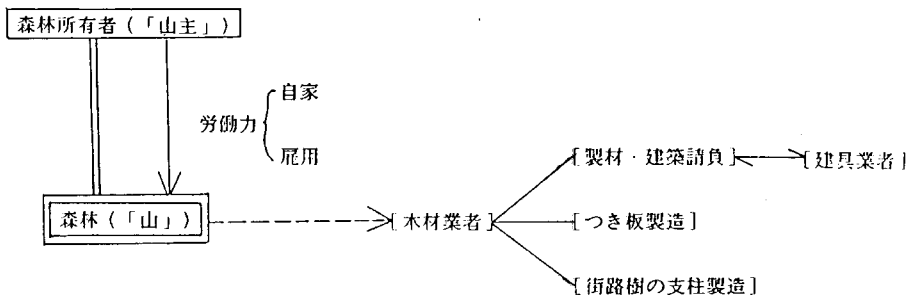
a. 農地改革以前



b. 農地改革～昭和30年代前半



c. 昭和30年代後半以降



[凡例] 木材生産者 [], 木材利用者 [], 労働力 { 多 → 少 → } 木材利用 --->

図2 山武町における森林維持の構造

また、労働力に関連するものとして、農業における農閑期の存在があった。昭和30年代前半まではこの地域の農業は、夏作の水稻・落花生と冬作の麦が一般的な作物であったので、冬期のみならず夏期にも農閑期は存在し、農民は、一年分の燃料を採取したり、生計の面においても、林業や建具業に関連した仕事に従事する、あるいは、せざるをえない状況だった。

山武町の平地林が所有者だけでなく山武町の住民全体に価値のある存在であった農地改革以前の状況を図2-aに表した。当時は、建具業者を主たる需要者として、森林を所有する「[山主]=地主」と燃料や土地を必要とする小作人という関係によって、森林が維持されていた。

この関係は、第二次世界大戦とその後の農地改革、昭和30年代中期以降のエネルギー革命と農業経営の変化によって解体されていく。

森林資源に影響を与えたのは、第二次大戦中の軍需用材、その後も続いた船材としての大径木の伐採と、農地改革による地主層の困窮、未墾地解放による森林の開墾で、これが森林面積を減らす結果となった。また、戦後は復興用材として木材需要が増したため、造林も盛んとなったが、マツ前植えの方法をとらずにスギを直接植える場合が多くなり、スギの材質が低下してきたともいわれている。

林業経営の面では、農地改革による地主・小作関係の崩壊によって、労賃という新たな経費が生み出され、森林所有者を圧迫することになった。

また、農業におけるスイカ・ニンジンなどの野菜作の導入は、従来林業労働などにあてられていた農閑期を喪失させ、ほとんど同時に進んでいく農業就業者数の減少とともに林業労働者の減少・高齢化をもたらした。

林業の地位が相対的に低下していった原因としては、エネルギー革命によって燃料源としての価値を失ったことも大きいと考えられる。山武町の平地林は用材林と薪炭林としての利用が一体となって維持されていたからである。

需要面では、戦後新しく製材業者が誕生し、30年代から40年代にかけて、山武町の木材の主たる利用者は、建具業者から製材業者に移行していく。町内の建具業が戦後の復興による好況期以後、鹿沼・小川町などの産地におされて衰退しはじめた

反面、製材業者は、高度成長による建築ブームに支えられて製材から建築請負へと業務を拡張し、山武町の木材利用の中心となった。

戦後の山武町における森林を中心とした所有・維持・利用関係を図2-b, cに示した。この時期は農家が燃料源、耕地の供給地として森林に依存しており、森林からの木材の利用者として建具業者と製材を主とする木材業者が併存していた昭和30年代前半までと、それ以後に区分できる。昭和30年代後半から40年頃にかけては移行期といえるが、建具業者が地元材を使用しなくなり、主として国産他産地材や外材を使用するようになる昭和40年代以降は町内における木材の主な利用者は製材を主とする木材業者となる。建具業者は製材品を市場で仕入れ、サンプスギのみ町内の製材業者に製材してもらいようになり、「山主」との直接のつながりは消えて、「元占め」と呼ばれた建具業者を中心とする木材の利用者集団は消滅した。

それにかわって木材業者が木材の利用の中心的存在となり、地元材を用いた建具製造の減少によって製材を主とする木材業者が建築請負に進出する。その背景には、昭和40年代における農家建築の増加や、購入した木材を無駄なく利用できるという利点があった。町内の製材業者が建築請負を行うことによって、建具業者はそこから仕事を得ることができ、戦前とは反対に建具業者が木材業者に従属する形となった。しかし、この時期は価格の割高なサンプスギを使った建築は山武町を中心とした近隣の農村地帯、あるいは、九十九里海岸地帯が主体で、サンプスギが製品として県外に出回ることにはなくなった。

建具業者に代って木材業者という新しい利用者を得て、引き続き一定の木材需要が確保されたことは、山武町において現在まで林業を存続させる原因となったと考えられる。

近年、特に昭和55年(1980)の第二次石油ショック以降の木材需要の停滞は深刻で、森林所有者、製材・建築請負業者、建具業者に与えている影響は大きい。

これに関連して、森林の転用が問題になると考えられ、農家労働力の点から農地へ転用される可能性は少なく、山武町で昭和56年(1981)から造成が開始された4つの住宅団地において開発前の土地利用面積に占める森林の割合が約60%³⁾であ

ることは、今後の山武町の森林の一つの動向を示しているといえる。

山武町の森林は林業専業で経営していくには規模が小さいが、その規模の零細性が有利に働いている面もあり、今後も林業は、農業その他の収入を投入することによって副業的に営まれていくと考えられる。森林は、戦後の造林によるものが徐々に伐期に達してきており、安定した需要を見出すことがその存続につながるものとする。

4. おわりに

以上、千葉県山武町における林業の成立とその変遷を平地林という自然と人間の相互作用の結果として考察を進めてきたが、今後の課題として、平地林について東関東と西関東の樹種の違いに注目して、江戸・東京を中心に形成されてきた関東地方の各地域における役割と他産業との関係を明らかにし、森林が他用途に転用される場合の要因として人口との関連を考えたい。

また、現代において平地林を維持し、林業を続けていこうとする人間の意志を、地理学においてどのようにとらえればよいかを学びたい。

注

- 1) 昭和55年度～57年度に(社)日本林業技術協会が林野庁からの委託を受けて行った平地林に関する調査の際に用いられた定義であり、従来から基準とされていた「標高300m以下、傾斜15°以下」と一致していること、地形分類図との対照から関東地方の低地・台地・丘陵地の山麓緩斜面と対応していることを確認したのでこの定義を用いた。また、東京都については島嶼部を除く地域を対象とした。
- 2) 前述の定義にしたがって関東地方において平地林の分布する市町村を対象とした。
- 3) 千葉県林務課（1979）：千葉県林政のあゆみ
- 4) 千葉県山武郡教育会（1916）：山武郡郷土誌
- 5) 山武町の集計による。

The Formation and Changes of Forestry Area on Flatlands
Focusing Sanbu-machi in Chiba Prefecture
Keiko HAMANO